

## 陶淵明「乞食」の詩の寓意について

沼口 勝

陶淵明（三六五～四二七）の「乞食」の詩一首は謎の多い作品である。

そもそも「乞食」と題してはいるが、作者が実際に食を乞うた体験にもとづくものであるのか、あるいはまた、なんらかの寓意をこめたものであるのか、作品解釈の原点ともいべきかかる問題についてさえ、今日なお定説らしきものがないのである。この点に関して一海知義氏は、『乞食』を淵明一流のフィクションだとするかどうか、これも説のわかれるところであるが、後世の批評家たちの間で、假託の詩とする説がすくなくないこともたしかである。<sup>(1)</sup>（傍線は筆者。以下同じ）と指摘されるのである。紀実か、寓意か、という問いが今なお問われること自体、この詩が謎を秘めた作品であることの象徴ともいえよう。

わたくしの考察によれば、作者が若い頃、ある人物に對

し、胸奥に秘めるある<sup>い</sup>想<sup>い</sup>念<sup>い</sup>を打ち明ける機会があり、後年その人物が死歿した時、そのことがらを回顧して食を乞う話に仮託した、いわば紀実にして寓意の作が「乞食」の詩ではないかと推測されるのである。そして、その作者の<sup>い</sup>想<sup>い</sup>念<sup>い</sup>とは、おそらく社会の現実に対する批判とその理想的なあり方への模索、そしてその夢の実現についてであったのではないかと考えるのである。また、仮託の法を用いたのは、もとよりことごらの真実を<sup>い</sup>輻<sup>い</sup>晦<sup>い</sup>し秘匿するためであらう。

小稿において、まずこの詩の擬装の手法を分析解明し、次にその寓意の所在を確認する。そしてその結果問題として浮上してくるであらう、詩中作者に食を恵む「主人」像に焦点を当てて究明し、さらにまた作者の他の詩文との関連を追求することにより、この詩の寓意を明らかにしたいと考える。

「乞食」の詩は五言十四句からなる次のとき作品である。

飢來驅我去 不知竟何之 行行至斯里 叩門拙言辭 主人解余意 遺贈豈虛來 談諧終日夕 觴至輒傾杯 情欣新知歡 言詠遂賦詩 感子漂母惠 愧我非韓才 衡戟知何謝 冥報以相貽	飢え來たりて我を驅り去る 知らず 竟に何くに之くかを 行き行きて斯の里に至り 門を叩けども 言辭拙し 主人 余が意を解し 遺贈あり 豈に虚しく來たらんや 談諧ひて日夕を終へ 觴至れば輒ち杯を傾く 情に新知の歡を欣び 言詠して遂に詩を賦す 子が漂母の恵みに感じ 我が韓の才に非ざるを愧づ 衡戟 何に謝すべきかを知らんや 冥報 以て相貽らん
--	---

この詩の大意は、作者がある家の門を叩いて食を乞う

と、主人が快く請いに応じてくれたばかりか、ともに歓談し、杯を傾ける厚意を示してくれたので、作者は新たな友情を喜び、その感懷を詩に賦したのであった（以上冒頭から第十句まで）、そして、主人の恩恵を漢の韓信に食を恵んだ漂母のそれに譬えて謝する一方、出世した後千金を報いた韓信のごとき才のないみずからを愧し、心にとどめる感謝の意（＝衡戟）はいかに表すべきかを知らないほどに深い、せめて冥土から報ゆる（＝冥報）こととしたい（末尾四句）と述べるものである。

陶淵明の作品に対する解釈・研究が、汗牛充棟も嘗ならぬ堆積をもつものであることはいうまでもない。しかし、「乞食」の詩意の理解については、右のごとき解釈の範疇から外れるものは、従来ほとんど見出すことができないようである。紀実か寓意かについては説が分かれるものの、解釈においては軌を一にしていたのだといえよう。

ところでここに興味深い一つの資料がある。それは漢の焦延寿の撰と伝える『焦氏易林』（十六卷）の四千九十六首にのぼる多数の繇辭（占いのことば）群中に、「乞食」という語を含む繇辭一首の存在が確認されることである。因に最近の研究により、陶淵明の詩文には『焦氏易林』の繇辭が頻用され、その書が彼の愛読書であったことが判明し

ているのである。<sup>(2)</sup>したがって、「乞食」の語を含む繇辭の存在と「乞食」の詩との関連性については、充分検討に値するものと考えられる。まず、その文を左に示す。

從首至足 首より足に至るまで

部分爲六 部分 六と爲る

室家離散 室家 離散し

逐南<sup>ナ</sup>乞食 逐はれて南し食を乞ふ

(卷十二、升之萃)

これは伍子胥の故事を典拠とする繇辭のようである。すなわち、父兄を殺されて一家離散の悲慘を嘗めた伍子胥が、その復讐を誓い放浪した末、呉に潜入しようとして病み、食を乞うたことをいうものである。ことがらは周知のごとく『史記』『伍子胥列伝第六』に簡潔に示されている。次にそれを示す。

鄭定公與子產誅殺太子建。建有子名勝。伍胥懼、乃與勝俱奔吳。……伍胥未至吳而疾、止中道、乞食。

また、『戦国策』『秦策卷第三』に范雎の次のごときことばとしても語られている。

伍子胥囊載而出昭關、夜行而晝伏、至於澹水、無以餌其口、坐行蒲服、乞食於吳市。

『戦国策』・『史記』が簡潔に「乞食」とだけしるした簡

所は、実ははなはだ劇的結末をもつ物語を蔵しているのである。後漢の趙曄の撰『吳越春秋』『王僚使公子光伝第三』によれば、伍子胥が食を乞うた相手は、瀬水に綿を撃つ一女子（漂女）である。彼女は食を与えた後、伍子胥の秘密を守るためみずから入水するのである。次にその文を示す。

(子胥)至吳、疾於中道、乞食溧陽(今建康屬邑)。適會女子擊綿於瀬水上、宮中有飯。子胥遇之、謂曰、夫人可得一餐乎。女子曰、妾獨與母居、三十未嫁、飯不可得。子胥曰、夫人賤窮途少飯、亦何嫌哉。女子知非恆人、遂許之。發其簞筥飯其盎漿、長跪而與之。子胥再餐而止。女子曰、君有遠逝之行、何不飽而餐之。子胥已餐而去。又謂女子曰、掩夫人之壺漿、無令其露。女子歎曰、嗟乎、妾獨與母居三十年、自守貞明、不願從適。何宜饋飯、而丈夫越虧禮儀、妾不忍也。子行矣。子胥行反顧、女子已自投於瀬水矣。

右の物語の後日談として次のごとき話が伝わっている。すなわち、楚の平王の墓を掘り、その屍を鞭うち父兄の復讐を遂げた伍子胥は、帰途瀬水のほとりを過ぎ、漂女が投身した水中に百金を投じて去るというものである(『吳越春秋』『閭閻内伝第四』)。

ここで、伍子胥と漂女のご事を詩中に用いる韓信と漂女のご事とに對比し、その類似する点と背反する点とを抽出し、これを典拠とする場合、解釈上に及ぼす相違について考察したい。比較の対象である『史記』「淮陰侯列伝第三十二」の冒頭の一節と、漂母に報いる一節とを次に示す。

淮陰侯韓信者、淮陰人也。始爲布衣時、貧無行、……常數從其下鄉南昌亭長寄食、數月、亭長妻患之、乃晨炊蓐食。食時信往、不爲具食。信亦知其意、怒、竟絕去。信釣於城下、諸母漂、有一母見信飢、飯信、竟漂數十日。信喜、謂漂母曰、吾必有以重報母。母怒曰、大丈夫不能自食、吾哀王孫而進食、豈望報乎。……信至國、召所從食漂母、賜千金。

まず、類似する点から挙げるならば、漂女から食を恵まれることである。ただし、韓信の場合は漂母が飢えている韓信を見て飯したのであって、韓信から「乞食」したのではない。「乞食」するという点から見ると、韓信の場合、南昌の亭長の家に「寄食」したことがこれに近いのである。伍子胥の場合は、みずから「乞食」していることはすでに見たごとくである。

次に背反する点であるが、伍子胥と韓信とでは「乞食」するに至る経緯において全く異なっている。周知のごとく、伍子胥は父兄の復讐のために放浪するのであり、一方韓信は無頼の徒であるに過ぎない。情念の激烈さにおいて両者の間には大きな距離があるであらう。また、相手に対する報恩という点で、韓信が漂母に千金を賜与し得たのに対し、伍子胥の相手の漂女は、すでに見たごとく、彼の秘密を守ってみずから入水してしまふのである。後、伍子胥は彼女の投身した瀬水中に空しく百金を投ずることとなる。

したがって、もし「乞食」の詩で用いる韓信と漂女のご事が擬装のための仮の典拠であって、真の典拠は伍子胥と漂女のご事であったとするならば、この詩の解釈は従来のそれとかなり異なってくるものが考えられるであらう。そして、かかる仮説を裏証するに足りる資料がここにあるのである。

すなわち、これもまた『焦氏易林』の繇辭であるが、その中に一首、韓信が「寄食」したという故事に拠るものの存在が確認されている。これは伍子胥が「乞食」した故事に拠る繇辭の存在することと関連して、興味深い事実であるといえよう。次にその文を示す。

依叔墻隅 叔の墻隅に依れば

志下勞苦 志下り勞苦せん

楚亭農食

楚亭 農に食らひ

韓子低頭

韓子 頭を低る

(卷四、同人之震、卷六、賁之剝)

この繇辭の第一・二句は、韓信が叔父の家の片隅で辛苦の日々を送ったことを、また、第三句は、南昌の亭長の家に「寄食」して恥ずかしめを受けたことを、さらに第四句は、淮陰屠中の少年に侮りを受けたいわゆる「股くぐり」のことを、それぞれ述べるものである。

韓信の故事を典拠とする繇辭は他に二、三存在するが、漂母との故事を典拠とするものは見出すことができなかった。

以上の諸資料の検討から、「乞食」の詩に用いる擬装の手法を、次のように説明することができないのではないかと考える。

すなわち、作者は、最初伍子胥の「乞食」の繇辭から漂女に「乞食」した故事を典拠として用いることを考えたが、これでは真意が露われるのを恐れ、韓信が「寄食」した故事に拠る繇辭から連想した漂母との故事を、擬装典拠として用いることに想到したのであろう。換言すれば、伍子胥が漂女に「乞食」した故事と、韓信が漂母に食を恵まれた故事とを、巧妙に拘り替える擬装の手法を着想し、こ

れを試みたのである。

それでは、伍子胥と漂女の故事を真の典拠とすることによって、「乞食」の詩の解釈とその寓意はいかなるものになるであろうか、その問題を次章で考察することとした。

### 三

前章においてすでに述べたごとく、伍子胥が「乞食」するに至る経緯、またその情念には、はなはだ激烈なものがある。さらに、漂女が伍子胥の秘密を守って死んだことにより、彼は彼女に報恩する機会をもたなかったことになった。

今、かかる視点を「乞食」の詩の解釈に取り入れて推論するならば、韜晦されていたその真意は、次のごとくになるのではないか。

すなわち、伍子胥を作者の、漂女を「主人」の、それぞれば仮託と見なすならば、作者が「主人」に乞うたのは、食ならぬ、彼の胸奥に秘めたある想念に対する理解というようなものであったのではないか。そのある想念とはすでに第一章で説明したが、それは激烈な情念に貫かれるものはなかったかと考えられる。反体制的性格をもつゆえに、

それはもとより秘匿することが求められたであろう。作者からそのある、想念を打ち明けられた「主人」は、作者に対し理解と共感を寄せ、しかも信頼に応え終生そのことがらを胸奥深く蔵して、決して他に漏らすことなく世を去ったのであった。この詩は、「主人」の死に際して、彼が与えてくれた大きな意味における恩義に対し、作者の感謝の心を賦したものと考えられる。

このことをこの詩の構成として具体的に指摘するならば、冒頭の句「飢來驅我去」から第十句「言詠遂賦詩」までは、「主人」との親交を回顧する箇所であり、そして末尾四句「感子漂母惠、愧我非韓才、銜戢知何謝、冥報以相貽」は、すでに幽明境を異にする「主人」に対して発せられた、作者の感謝のことばと理解すべきであろう。従来への解釈の多くは、第十句以前と末尾四句とを「主人」の家での一連の場面でのことがらと解しているようである。それは誤りではないであろうか。

さて、右のごとく理解するとき、第十三・第十四句の解釈、殊に「銜戢」「冥報」の二語のそれを改めて検討しなおさなければならぬ。

まず、「銜戢」の語であるが、清の聞人俠は、「按ずるに、銜は感なり。『爾雅』に戢は聚なり。……銜戢とは感

荷の意。……言ふところは其の恵みに感じて之を心に蔵するなり。」といい、また、民国の丁福保は、「銜は心に蔵し、戢は口に歛むるなり。」という。<sup>(3)</sup> 両者は説き方に多少の相違があるものの、恵みに感謝する意に解釈する点ではひとしい。従来の説はおおむねかくのごとくである。

私見によれば、「銜戢」とは秘密を胸奥深く蔵して口外しないことをいう。『説文』に「銜」はくづばみの意という。そこから行軍の兵士の口に枚を銜ませる（「銜枚」）という意が生じ、また「含」と同じく忍ぶという意が生ずる。<sup>(4)</sup> 「銜戢」の銜も含と同義で、秘密を保持して口外しないことであろう。さらにまた、「戢」は戦いに用いた武器をしまうのが原義。『説文』に「兵を藏むるなり」という。「銜戢」の戢も人に知られると禍いを招く秘密を胸奥深く蔵しておく意と思われる。

詩の第十三句「銜戢知何謝」とは、「主人」が作者の打ち明けたある、想念を、胸奥深く蔵して終生口外することなく守り通したことに對して、ことばではいづくせぬほどに深く感謝しているという意に解すべきであろう。

次に「冥報」の語の解釈に移りたい。

「冥報」を死後の世界（「冥界」）から恩に報ゆる意と解するのが、従来への解釈のおおむねの傾向である。その一例

を挙げると、民国の古直は、「冥報は、之に死後に報ずるを謂ふ。蓋し暗に左伝の草を結んで以て杜回を亢る意なり。」と解している。<sup>(5)</sup>ここに引く『左伝』の故事とは、晋の魏顓が父の死後その愛妾を殉死から免れさせ再嫁させたところ、後に輔氏の役の時、道の草を結わえて秦の勇士杜回を躡かせこれを捕獲するのを助けた老人がいたが、その夜の魏顓の夢にかの老人が現われ、娘の恩返しをしたのだといったというものである。また、遼欽立氏も同じく、「冥報は、死後幽冥より恩に報ゆることである。」といい、さらに白川静氏は、「死者が現世に報恩することを冥報という。」と説くのである。<sup>(6)</sup>

「冥報」の語を冥界での報恩の意と解することは首肯し得るが、死者が現世に報恩することと解するのはいかがなものか。少くともこの詩の場合には適合しない解釈であろう。なぜならば、「主人」はすでに冥界の人のはずであって、作者が冥界から現世に報恩しようにもそのすべはないからである。したがってここでは、作者が死後同じ冥界の人として報恩する意でなければならぬ。

ところで、「冥報」の語についてはすでに先学の研究がある。それを以下簡略に紹介する。

木村英一編『慧遠研究—遺文篇—』の「譯注篇 慧遠文

集」に、「冥報」の語の注として、『冥應』と同義。陶淵明の乞食詩に、『冥報以相貽』とあり、顏延之の陶徵士誄（文選卷五七）には、『冥漠報施』とある。」という。これは「本文篇 慧遠文集」の附録五、戴安公（晋の戴逵）の「釋疑論答周居士難」に、「既に能く此の教事を体して、然る後分命審かにす可く、冥報を祈めざるのみ。」というのに注したものである。<sup>(7)</sup>

この戴逵の文の「冥報」は、仏教における因果応報を指すもののようである。仏教上の応報には現報・生報・後報の三種があると説かれており、「現報とは、善惡の業が此の身に始まって、その報をすぐこの身に受けるのをいい、生報とは、来生に生まれてその報を受けるもの、後報とは、（すぐ次の世に報を受けないで）、あるいは二生、三生、百生、千世を経てはじめてその報を受けるものをいうのである。」とするのである。<sup>(8)</sup>

仏教の因果応報を「冥報」というのは、その説が、在来の教えの、例えば「善を積めば徴有り」（『焦氏易林』の繇辭の一句）というがごとき簡易さと異なり、はなはだ深遠冥昧で難解なものであったからで、「冥界での報い」という意味からではないであらう。顏延之が善人への報いの薄いことを、「冥漠として報施す」といったのも、仏教で

の「冥報」を意味してであったと思う。

以上の検討から、「冥報以相貽」の句は、「冥報」を冥界での報恩の意に解すれば、死後冥界に行ってから恩に報いたいという意となり、仏教上の「冥報」の意を含んで解すれば、自分は頼みがたい報いを貽ることしかできない意となるであろう。しかし、前者のごとく解すべきことはすでに述べた通りである。

以上、「乞食」の詩の韜晦されていた真の意味について論述した。

それでは次に、この詩の「主人」とはいったい誰であるのか、この問題を究明することとしたい。

#### 四

陶淵明が「乞食」の詩に、伍子胥と漂女（ひょうにょ）の故事を真の典拠として選んだ動機はどこにあるのかという点と、一つには、すでに言及したごとく『焦氏易林』にその故事に拠る繇辭（しやうじ）が存したことであろう。そしてまたこれと並んで、作者は、「主人」を訪問するその機会に、彼と彼女との故事に因む旧蹟（きうせき）を实地に見聞することがあったであらうと思われる。次にその点から論じたい。

伍子胥が「乞食」し、そしてまた百金を投じたと伝える地は、「投金瀬」また「金瀬」と名づけられ旧蹟とされた。その所在地について、「伍子胥列伝」の宋・裴駰（裴駰）は、「張勃曰く、子胥の乞食せし処は丹陽の溧陽縣なり。」という。さらに唐・司馬貞（司馬貞）は、「集解」のこの引用について、「按ずるに、張勃は晋の人、吳の鴻臚（こうろ）の子なり。『吳録』を作る。裴氏注之を引くは是なり。溧は音栗、水名なり。」と述べている。これによれば、伍子胥の「乞食」した処は、晋初、丹陽郡溧陽縣にあったことが張勃により明言されているのである。

それでは、右の晋の丹陽郡溧陽縣の所在は今のどこに当たるのか。諸祖耿撰『戦国策集注彙考』の注に引く、清の程恩沢撰『戦国策地名考』は、「即ち今の鎮江府溧陽縣なり。」という。今、江蘇省溧陽縣の西北四十五里の地である。

ところで、遼欽立氏の「陶淵明事迹詩文繫年」<sup>(9)</sup>によれば、陶淵明はその生涯において都建康に二度、および京口に一度、公務で赴く機会をもったという。それらの詳細は左のごとくである。

[I] 隆安四年庚子（四〇〇）、陶淵明三十六歳。前年（三九九）、桓玄の官吏となり、その使者として建康に赴く。



「庚子歲五月中從都還阻風於規林」詩二首。

〔Ⅱ〕 元興三年甲辰（四〇四）、陶淵明四十歲。二月、劉裕

桓玄討伐の兵を挙げ、三月、建康を占領、鎮軍將軍となる。四月、劉裕の諸將 桓玄の軍を淝口に破り、潯陽に進拠す。五月、桓玄 潯陽に幽閉していた安帝を拉致し江陵に逃走するも、その地で敗死。「陶淵明」東下して京口に赴き、劉裕の鎮軍參軍となる。「始作鎮軍參軍經曲阿作」詩あり。

〔Ⅲ〕 義熙元年乙巳（四〇五）、陶淵明四十一歳。三月、安帝

建康に帰る。四月、劉裕京口に幕府を開く。「陶淵明」三月、江州刺史建威將軍劉敬宣の參軍として建康に使用する。「乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪」詩あり。八月、彭沢の令となるが、十一月、職を辭し郷里に帰る。

建康（南京）、京口（鎮江）および曲阿（丹陽）と伍子胥の「乞食」の地溧陽とは比較的近接している。陶淵明が右の三度の東下の機に、伍子胥の旧蹟を実地に見聞する機会をもったであろうことは充分に考えられる。

それでは右の時期、建康近辺の地に在り、陶淵明と胸襟を開いて語り合えるような器量をそなえ、しかも彼より早く死歿した、そういう人物を探索発見することができるのであるか。

この問題を解明するために、わたしの採る方法は次のごとくである。

それはすなわち、陶淵明の周辺の人物を端緒として探索するといふものである。すでに見たごとく、作者は自分自身と「主人」とのことがらの真実を、韜晦擬装してまで深く秘匿しようとする。そのことは裏を返せば、真実は作者の周辺に存在するというしるしでもある。そこで、わたくしは作者の著した伝記的詩文に登場する人物關係を検討することにした。その結果、有力な候補者として浮かび上がってきた人物が、江州刺史の劉柳である。

劉柳については周知のところとは思ふが、論述の關係上、以下にやや詳しく記すこととする。まず、彼にまつわる一挿話の紹介から始めよう。

隆安三年（三九九）十一月、天師道の徒孫恩の率いる叛亂軍が会稽を攻めた。内史王凝之は、自ら信する五斗米道の神力に頼り防備を怠った結果、賊兵に殺害される。この時、凝之の妻謝氏（字道韞、謝奕の女）は举措自若、婢に肩輿を命じ、刀を抽いて門を出で、亂兵數人を手殺したという。亂後も道韞はその地に嫠婦として住まう。太守劉柳がその名を聞き、ともに談議せんことを請うと、道韞もとより柳の名を知っていて自らは阻まず、兩者の談議が実

現する。その会合のさまを『晋書』の「列女伝」(卷九十六)は左のごとくに伝えるのである。

道韞……乃簪髻素褥坐於帳中、柳束脩整帶造於別榻。

道韞風韻高邁、敍致清雅、先及家事、慷慨流連、徐酬問旨、詞理無滯。柳退而歎曰、實頃所未見、瞻察言氣、使人心形俱服。道韞亦云、親從凋亡、始遇此士、聽其所問、殊開人胸府。

道韞は『世説新語』にその逸話を伝える賢媛の誉れ高い女性である。「実にこの頃未だ見ざる所にして、言の氣はいを瞻察すれば、人をして心と形と俱に服せしむ。」と柳が歎じたというのも首肯することができる。一方、その道韞をして、「親、凋亡してより、始めてこの士に遇ふ。其の間ふ所を聴けば、殊に人が胸府を開かしむ。」といわしめた柳もまた、おそらく深い洞察力や大きな包容力をそなえた魅力ある人物であつたにちがいない。

陶淵明の詩文に劉柳の名があらわれることはないようである。しかし、柳の父耽は、淵明が著した彼の外祖父孟嘉の伝、「晋の故征西大將軍の長史孟府君の伝」の末尾近くに、次のごとく登場するのである。

光祿大夫南陽劉耽、昔與君同在溫府。淵明從父太常襲嘗問耽。君若在、當已作公不。答云、此本是三司人、

爲時所重如此。

これによれば、劉耽がかつて桓溫の下で孟嘉と同僚であつたこと、また、従父の陶璜の問いに孟嘉が三公になり得る人物であつたということを語つたこと、それらは陶淵明の知悉するところなのであつた。

ここで劉耽の家系について簡略に説明する。

南陽の劉氏は漢の宗室につながる名族である。耽の五世の祖虞は魏の侍中、祖父喬は西晋の鎮東將軍・豫州刺史であつた。喬の伝は『晋書』卷六十一にあり、耽と耽の子柳の伝もこれに付載する。

劉耽の伝で注意を引くことがある。それは桓玄の夫人は耽の女であり、玄が輔政となり(元興元年、四〇二)、耽の昇官を計らうことがあつたが辞退していることである。これはおそらく玄の人物の姦邪な点を見抜いて、いわゆる「明哲保身」の態度で処したものであろう。かかる洞察力と処世態度は子の柳にも受け継がれているかに見られるのである。

劉柳の伝は次のごとくである。

柳、字叔惠、亦有名譽。少登清官、歷尚書左右僕射。時右丞傅迪好讀書而不解其義、柳唯讀老子而已、迪每輕之。柳云、卿讀書雖多、而無所解、可謂書簞矣。時

人重其言。出爲徐・兗・江三州刺史、卒。贈右光祿大夫、開府儀同三司。

ここには、多読を誇りながら書物の真意を解さない傳迪を書簞、すなわち本箱というべきだと遣りこめた柳の皮肉な一面と、『老子』一書のみを読んだということが語られている。『老子』は「生きるための英知と死ぬための諦観」を説き、「現実の社会に強い政治的関心をもち、時として現実の爲政者たちの在り方に鋭い批判を浴びせる」書であるといわれている。<sup>12)</sup> その書のみを好んで読んだ柳という人物も、まさにそうした英知と諦観、現実社会への強い関心と鋭い批判とをあわせもつ存在でなかったであろうか。

さて、ここで諸書にしろす柳の経歴についてできるだけ詳しく述べることとする。

前述した柳が道韞を訪うたことは、王凝之殺害の翌年、すなわち隆安四年（四〇〇）であろうと推定される。道韞の伝（『晋書』「列女伝」）には「太守、劉柳」とのみしるすのであるが、彼女が会稽に居たことから、柳は会稽郡太守であったと見るべきであろう。

また、『宋書』「謝瞻伝」（卷五十六）によれば、柳が呉郡太守の任にあったことも知られる。

すなわち、瞻は初め桓玄の兄偉の安西參軍・楚台秘書郎となる。しかし、叔母劉氏が弟柳の呉郡太守となるのに随うこととなり、瞻もまた職を解いて随行し、柳の建威長史となる。それは瞻が幼くして孤児となり、叔母に撫養される恩があったためという。その後、瞻は高祖劉裕の鎮軍參軍、宋國の中書・黃門侍郎、さらに相國從事中郎となるというように、劉裕の下で重用されるのである。

柳が呉郡太守に在任したのは、桓偉が安西將軍となる元興元年（四〇二）三月から、劉裕が鎮軍將軍となる元興三年（四〇四）三月ごろまでの期間を含んでいる。太守の任期を三年間と見なすと、<sup>13)</sup> 義熙元年（四〇五）ぐらいいまではその任にあったといえよう。

柳が江州刺史となったのは、義熙十一年（四一五）である。そして翌年（四一六）六月、新たに尚書令に除せられたものの、任地江州で卒したのであった。柳の子湛の伝（『宋書』卷六十九）に、「父柳亡於江州」という。湛の生年は孝武帝・太元十七年（三九二）、卒年は宋の文帝・元嘉十七年（四四〇）であるから、柳は陶淵明とほぼ同年輩と推定することができるであろう。以上が柳の経歴である。

ところで、右に言及した謝瞻は、陶淵明とも交渉をもつ

ことのあった人物である。まず、鎮軍將軍の劉裕の參軍として同僚であったことが挙げられる。時に謝瞻は十八歳、陶淵明は四十歳である。さらに永初二年（四二二）、豫章太守として赴任する瞻のために、江州刺史王弘が主催する送別の宴で席をともにする。淵明の「王撫軍の座に於て客を送る」と題する詩は、その際の作である。

謝瞻の他に、劉柳と深い関係にあり、なおかつ陶淵明と交渉をもつ人物としては、周統之（三七七～四二三）と顏延之（三八四～四五六）とを挙げることができる。

周知のごとく、劉遺民、周統之、および陶淵明は「潯陽三隱」と称された。これは義熙九年（四一三）のことである。そして、義熙十二年（四一六）、劉裕の北伐に際し、その嫡子義符が健康を留守するが、統之は迎えられて礼を講ずることがあった。これは劉柳の推薦によるものであらう。劉裕に宛てる柳の推薦文が統之の伝（『宋書』「隱逸伝」卷九十三）に収載されている。また、淵明の「示周續之・祖企・謝景夷三郎」詩も同年の作である。

顏延之は言うまでもなく著名な文学者、そしてまた「陶徵士誄、并序」（『文選』卷五十七）の作者でもある。延之は劉柳が後將軍・吳国内史の時、その後參軍として起官し、ついで主簿に転じ、長く柳の属僚として過ごす。まさ

に延之自身が、「（劉の）家吏と作る<sup>（た）</sup>」と語ったような深い関係をもつのである。彼は柳が江州刺史となると、その後軍功曹として潯陽に来て陶淵明と交友を結ぶ。後、劉義符の属僚に転じ、劉裕が北伐して洛陽を陥れ、その功により宋公を授けられると、祝賀使節として北に赴いたのであった。延之が義符の下に出仕したことも、おそらくは柳の勧めによるものであったであろう。

以上の検討によって、劉柳周辺の人物、謝瞻、周統之、および顏延之の三人が、陶淵明ともまた交渉をもつことが明らかとなった。また、劉柳はこれらの知識人たちを、劉裕とその周辺に推薦したり、あるいは推薦しているのではないかと思われるような軌跡を残していることが判明した。これはあくまでも単なる推測に過ぎないが、陶淵明が劉裕の參軍となったことも、劉柳と関連があるかも知れない。

陶淵明の「孟府君伝」（略称）に示唆されて浮上してきた、この劉柳という人物は、すでに詳細に検討したごとく、多くの点において府節の合するところから判断して、「乞食」の詩の「主人」と推定してはば誤りないであろう。さて、劉柳という人物が浮上してきたことにより、新しい視点から陶淵明の生涯とその作品をとらえなおす可能性

が生まれてきた。次章において、その試みの一端を簡略に言及したい。

## 五

「乞食」の詩の冒頭に、「飢來驅我去、不知竟何之、行行至斯里、叩門拙言辭」という。これは作者が一種の精神的饑餓状況に陥り、その衝迫により劉柳の下を訪れたことを単純化して表現したものであろう。おそらくその訪問が前述した三度の東下の機会になされたであろうことは、陶淵明の別の作品、すなわち「飲酒」(二十首)其十の詩によってもまた推測されるのである。

在昔曾遠遊	在昔	曾て遠遊し
直至東海隅	直ちに東海の隅に至れり	
道路迴且長	道路 迴かにして且つ長く	
風波阻中途	風波 中途を阻む	
此行誰使然	此の行 誰か然らしめし	
似爲飢所驅	飢えの驅る所と爲るに似たり	
傾身營一飽	身を傾けて一飽を営まば	
少許便有餘	少許にして便ち余り有らん	
恐此非名計	此れ名計に非ざるを恐れ	
息駕歸閑居	駕を息めて閑居に帰れり	

右の「在昔の遠遊」が「似爲飢所驅」であるとするのは、「乞食」の詩に比してより婉曲な表現ではあるが、やはり精神的饑餓状況の衝迫がその原動力であることを表出したものであろう。

それではここにいう「遠遊」とは、いつのこととすべきか。概略次のごとき考え方が成り立つてであろう。

I「東海」とは東晋の南東海郡を指し、その治は曲阿にあった。<sup>(15)</sup>したがってここにいう「遠遊」は、元興三年(四〇四)、劉裕の參軍となり、京口に赴き、曲阿を経たときのことをいうとするもの。

II「東海隅」とは東海一帯の意で、建康を中心とする地方一帯を指している。詩中に「風波阻中途」とあることから、隆安四年(四〇〇)五月、都から還る途中規林という地で風に旅程を阻まれたことをいう詩のときの「遠遊」であるとするとするもの。

これらの説に対し、わたくしはこの詩の末尾の「息駕歸閑居」という表現に注目し、そこに官途への幻想を捨て、最終的に隱退の生活に入ったことをいう気分があると認めるのである。とすれば「東海隅」はIIの説と同じく解するが、「飲酒」其十は、作者の三度に及ぶ東下の行を一括して叙述したものであろうと考える。かく解すれば、「風波阻

以上のごとく考えるならば、陶淵明が劉柳を訪問したのは、彼の三回の東下のいずれかの機会であつたという外はない。もちろん彼等の間の交流はその後も続いたことである。したがって陶淵明が劉柳から受けることとなつた恩恵も、さまざまな点に及んだことと推測される。

それでは、このようにかけがえない友人である劉柳そのひとのことを、陶淵明が「乞食」の詩におけるよりもっと明瞭に、その作品中に形象化することはなかったのだろうか。

少年罕人事 少年人事罕

孫であるといい、そうであれば漢室の血筋である。殊に注

意すべきは、張仲蔚という高士の知己であったことである。晋の皇甫謐『高士伝』（卷中）に次のごとくいう。

張仲蔚者平陵人也。與同郡魏景卿俱修道德、隱身不仕。

明天官博物、善屬文好詩賦。常居窮素、所處蓬蒿沒人。

閉門養性、不治榮名。時人莫識、劉襲知之。

張仲蔚は隱者で、文章を善くし詩賦を好み、貧にして榮名を治めなかったという。劉襲だけが彼の唯一の友であった。

陶淵明が張仲蔚に似ることは説くまでもないであろう。ところが劉柳の人物像も劉襲にはなほだ似るように思われるのである。とするならば、陶淵明が自身と劉柳との關係を、張仲蔚と劉襲とのそれに擬して詠うことは十分考えられるであろう。

この詩の末尾「孟公不在茲、終以翳吾情」といういささか唐突で、また強い感情移入を伴う表現から判断すると、これは劉柳がすでに没してこの世にない孤独感を表出した詩であろう。前述したように劉柳の死は義熙十二年（四一六）六月であるという。一方、「飲酒」の連作は義熙十四年（四一八）秋の制作になるであろう。かく推定する根拠は、「飲酒」という詩題が『焦氏易林』の繇辭に由来し、それは劉裕が北伐から凱旋し、篡奪を実行しようとするこ

とを暗示していると考えるからである。それについてはまた別の機会に詳論する。劉柳の死と「飲酒」其十六との時間的前後關係に矛盾は生じないのである。

ところで張仲蔚と劉襲との關係を詠う詩が、陶淵明にさらに一首存する。いうまでもなく「詠貧士」（七首）其六である。次にその全文を示す。

仲蔚愛窮居 仲蔚 窮居を愛す  
遶宅生蒿蓬 宅を遶りて蒿蓬生ず

翳然絕交游 翳然として交游を絶ち

賦詩頗能工 詩を賦するに頗能く工なり

舉世無知者 舉世 知る者無し

止有一劉襲 止だ一劉襲有るのみ

此士胡獨然 此の士 胡ぞ独り然るや

實由罕所同 實に罕に同じうする所あるに由る

介焉安其業 介焉として其の業に安んじ

所樂非窮通 樂しむ所は窮通に非ず

人事固以拙 人事は固より以て拙なるも

聊得長相從 聊か長く相從ふを得たり

作者はこの詩で、劉襲が張仲蔚の唯一の知己であり得た理由として、氣持の通じあう稀有な相手であったこと、そしておのれの本業に安んじ、困窮と榮達というような世間

的価値を度外視する人物であったことによると述べている、とわたくしには思われる。とすれば、これは単に第三者としての貧士を客観的に描く態度ではなく、当事者として主観的に叙述する態度であろう。殊に末尾二句「人事固以拙、聊得長相從」は、陶淵明自身の述懐と解するのが最もふさわしい。この詩も明らかに、作者が劉柳との交友關係を張仲蔚と劉襲とのそれに仮託して詠じたものといえよう。

さて、以上の検討の結果、「乞食」の詩が陶淵明にとって最も深い信賴と尊敬とを寄せた友、劉柳の死に捧げて感謝の意を表す作品であることが明らかとなった。

それではわたくしがこれまでしばしば述べてきた、陶淵明が劉柳に語ったはずのある想念の具体的内容は、その作品のどこかに形象化されているのであろうか。また、それを探知する方途が残されているのであろうか。

ここにおいてわたくしは、あの「桃花源記」の末尾の一節に想到するのである。それは次のごとくしるす。

南陽の劉子驥は、高尚の士なり。之を聞き、欣然として往かんと規りしも、未だ果さず。尋いで病みて終りぬ。後、遂に津を問ふ者無し。

ここに登場する南陽の劉驥之、字は子驥という人物が、

実は劉耽（柳の父）の一族なのである。その伝は、『晋書』「隱逸伝」（卷九十四）にある。次にその伝の一節を引く。

劉驥之、字子驥、南陽人、光祿大夫耽之族也。驥之少尚質素、虛退寡欲、不修儀貌、人莫之知。好游山澤、志存遁逸。嘗採藥至衡山、深入忘反、見有一澗水、水南有二石函、一函閉、一函開、水深廣不得過。欲還、失道、遇伐弓人、問徑、僅得還家。或說函中皆仙靈方藥諸雜物、驥之欲更尋索、終不復知處也。

周知のごとく、右の劉驥之が採藥して衡山に踏み入り、仙藥等を蔵するという二石函を見つけたという話は、陶淵明の撰と伝える『搜神後記』卷一に収載している。

劉驥之には車騎將軍桓沖の長史となることを辭退したという逸話がある。また、「桃花源記」に「晋の太元中」のことといい、さらに「（驥之）尋いで病みて終りぬ」という。これらのことからすると、驥之は太元中（三七六―三九四）に病歿したことがわかる。

さて、「桃花源記」の素材や寓意についての言及や研究は、古來枚挙に遑がない。そして、例えば陳寅恪氏「桃花源記旁證」をはじめとするすぐれた著述に富むことも、いまさらいうまでもないことである。

しかし、あえて一つの試見を提したい。



すなわち、「桃花源記」は陶淵明がかつて劉柳に語った  
い、わゆるある理想、具体的にはすでに述べたごとく、社会  
の現実に対する批判とその理想的なすがたへの模索、そし  
てその夢の実現についての思考を、結晶化させ形象化させ  
た作品ではないであろうか。「雞犬相聞こゆ」る「桃花源」  
の集落のありさまは、多くの論者の指摘をまつまでもなく  
『老子』の「小国寡民」(第八十章)の世界を髣髴させるも  
のがある。かかる世界を陶淵明と劉柳とが語り合うことが  
あったであろうと想像することは、きわめて自然なことに  
思われる。なぜならば、陶淵明には漢末田子泰(名は疇)  
が徐無山中に入り、彼に従う人々と躬耕生活を営んだこと  
に対する憧憬を詠う詩(「擬古」其二)があり、一方の劉  
柳には『老子』の書に対する深い愛好があるからである。  
ここで、「桃花源記」の末尾に劉子驥との関連が付記さ  
れていることの意味を考えてみたい。

陳寅恪氏は前記論文の結論の一部として、次のごとくい  
う。

(丁) 桃花源記寓意之部分乃牽連混合劉驥之入衡山採  
藥故事、並點綴以「不知有漢、無論魏晉」等語所作成。  
右の陳氏の説に対し、わたくしは次のごとく推論する。  
すなわち、

陶淵明は劉子驥の石図を見たという話を、劉柳を通じて  
知ったと推測される。そして、その話から、彼が劉柳に語  
ったい、わゆるある理想を「桃花源記」の世界に形象化する  
ことを着想したのである。「桃花源記」に、「此の中の人語  
げて云へらく、『外人の、為に道ふに足らざるなり』と」と  
いうのは、その世界が陶淵明と劉柳との間に固く秘匿され  
ていたものであることを表していないか。とするならば、  
記中の劉子驥は、実は陶淵明が語る理想に対し共感を寄せ  
てくれた友、劉柳の仮託と見なすことができるであろう。  
「桃花源記」は「乞食」の詩と同根の作品と考えられる。

注

- (1) 「陶淵明における『虚構』と『現實』(吉川博士退休記念『中國文學論集』一九六八年 筑摩書房) 一九四・一九五頁参照。  
(2) 拙稿「陶淵明『擬古』九首其一の表現手法と寓意について」『中國文化』1993—漢文学会会報50号—一九九二年六月、大塚漢文学会) 参照。なお、上記の拙稿において、『易』を典拠とする表現を見落とした結果、次のように結論を誤った点がある。すなわち、例えば「陶淵明の『擬古』九首其の一は、晋宋易代の際、劉裕に加担し、晋の天子たちを欺いた、貴族たちの無節操と、欺かれた天子たちの軽佻愚昧さとを諷諷し……」(七六頁)とあるように、貴族たちを諷したものと解しているが、これは劉裕を諷したものと見なすべきであった。これに

ついては、日本中国学会第四十四回大会（一九九二年十月十八日、東京学芸大学）での研究発表「魏晉の文学と『焦氏易林』」において言及した。

なお、「擬古」其一と「焦氏易林」、さらに『詩』小雅「六月」「易」（睽の九四の爻辭）との関連については篇末に図示した通りである。

(3) 王士禎選・聞人倭箋『古詩箋』（上）（一九八〇年、上海古籍出版社）の「五言詩卷六、陶潛」参照。また、丁仲祐撰『陶淵明詩箋注』（一九七一年、藝文印書館）の「卷二」参照。

(4) 白川静氏は、「衡」について、「また含と同じく忍ぶ意があり、衡悲・衡冤・衡悔のように用いる。」と説く（『字統』一三七頁、一九八四年、平凡社）。

(5) 『陶靖節詩箋』（一九六四年、広文書局）の「卷二」参照。

(6) 邊欽立校注『陶淵明集』（一九七九年、中華書局）に「冥報、死後報恩於幽冥」と注釈する。また、『字統』八一八頁参照。

(7) 同書（昭和三五年、創文社）三〇七頁・六八頁参照。

(8) 同書「訳注篇」の「七 三報論」三一〇頁参照。

(9) 一九八五年、江蘇古籍出版社。

(10) 前掲書二六八〜二七五頁参照。

(11) 「内史」は「太守」と實際上異ならなかったようだ。『晉書』「職官志」（卷二十四）に、「郡皆置太守、河南郡京師所在、則曰尹、諸王國以内史掌太守之任」とある。これは後漢以来の制度であったようだ。

(12) 福永光司氏『老子』（昭和四三年、新訂「中国古典選」第六

巻、朝日新聞社）の「解説」一七・一八頁参照。

(13) 謝靈運の「過始寧墅」詩（『文選』卷二十六）に「揮手告鄉曲、三載期歸旋」とあり、李善はこれに「三載黜陟幽明、故以爲限」と注し、また、張統は「言舉手辭鄉人云、三載秩滿當期旋歸也」と注している。

(14) 『宋書』「顏延之伝」（卷七十三）に劉柳の子湛に向かい、「吾名器不升、當由作卿家吏。」といったと伝える。

(15) 『宋書』「州郡志一」（卷三十五）に、「晉元帝初、割吳郡・海虞縣之北境爲東海郡、立郟・朐・利城三縣、而祝其・襄賁等縣寄治曲阿。」という。これは元の劉履が「東海隅、指曲阿以東而言、蓋其地在宋爲南東海郡」（『風雅翼』卷五）とする根拠であろう。また「州郡志」は続けて、「穆帝永和中、（東海）郡移出京口、郟等三縣亦寄治於京」という。邊欽立氏の「東海隅、東海附近、指東晉京師建業一帶。」（前掲書九三頁参照）という説はこれに近い。

(16) 『箋註陶淵明集』卷三（四部叢刊正篇）。

(17) 「直案、孟公有二、一爲陳遵、一爲劉襲、詩曰、敝廬交悲風、荒草沒前庭、則絕似逢舊沒人、劉襲獨知之、張仲蔚家此、孟公必指劉襲也。」（『陶靖節詩箋』卷三）。

(18) 『後漢書』「蘇竟伝」に、「襲、字孟公、長安人、善論議、扶風馬援・班彪並器重之。」といい、その注に次のことくいう、「三輔決錄注曰、唯孟公論可觀者。」班叔皮與京兆丞郭季通書曰、「劉孟公臧器於身、用心篤固、實瑚璉之器、宗廟之寶也。」

（文教大学）

攝古其一  
易林  
小雅·六月

(1) 六月棲棲

戎車既飭

四牡騤騤

載是常服

玼玼孔熯

我是用免

王于出征

以匡王國

(略)

玼玼匪茹

整居焦穫

侵躡及方

于逕陽

(略)

薄伐玼玼

至于大原

文武吉甫

萬邦爲憲

吉甫燕喜

既多受祉

來歸自鎡

我行永久

依御諸友

無繁膺鯉

侯誰在矣

張仲孝友

(a) 曳綸河海

釣挂魴鯉

王孫利得

以饗仲友

(豐之坤)

初震後喜

與福爲市

八佾八列

飲御嘉友

(坤之小過)

六月采芑

征伐無道

張仲方叔

伐敵飲酒

(小過之未濟)

玼玼非度

治兵焦穫

伐矟及方

與周爭彊

元戎其駕

喪及夷王

(未濟之睽)

同載共輿

中道別居

喪我元夫

獨與孤居

(隨之比)

易

易

九四睽孤

遇元夫

象曰：交孚无咎，志行也。